

モーツァルト作曲：レクイエム 二短調 K.626 の鑑賞

生井先生、今日は貴重な鑑賞の時間をいただき、ありがとうございます。

まず初めに、奥の聖域に入るときの留意点をうかがいました。

実際に奥の聖域に向かっていると、植物や机の配置など、確かに先生がおっしゃった「狭い道」になっており、注意深くゆくりと丁寧に通るように心がけました。

奥の聖域に入るときは、以前も、雰囲気というより、さらに神聖な空気に変わるので感じていました。今回はさらに厳かな空気を感じました。

恐縮して一歩中に入ると、今度は目の前に絵画が広がり、急に教会の中に入ったときのような空気感に包まれました。

一番上の「最後の晩餐」のイエスキリストには光が当てられており、パンを食べている木菜子が目に入りました。

その下のミステーナ大聖堂の「最後の審判」は、大きく目の前にどんと置かれており、存在感はすごいものでした。

それから、その周りにもたくさんの絵が置かれており、私は特に右下の名前はわかりませんが、2人の方が火田(?)に立って祈っている木菜子の絵が印象に残りました。

そして、一本のろうそくを前に、音楽が始まりました。

以前、聴いたときには、低音の響きから下から上からくるような感覚を覚えたことが、今回は、高音の美しい響きから上から降ってくるような感覚の方が大きかったです。

レクイエムのそれぞれの曲が、目の前の「最後の審判」のそれぞれの場面、天国や地獄や、審判を待つ人々...とつながり、喜びや悲しみや怒りや嘆きなど、様々な感情がめどりました。

また、途中、トロンボーンやホルンの響きから始まり、柔らかく包みこむような声が聴こえてきたときには、まさに神の声が天から降ってきている、と感じました。それを聴くと、最後の審判で、自分も天国に行けるのか、地獄に行くのか...とか、天国や地獄での様々な状況や感情も、そういったものまで、すべてロマンチックなものに感じてきました。

神の世界というのは、それらを全部、乗り越えていて、その世界から見ると、「死」というのは、怖いことではないのかもしれない、と思いました。

「死」を考えると、「生」を考えると、まだわたしにはわからないことが多いですが、ただ「死」を恐れていても仕方ない。短い時間の中で、狭い世界の考えにとらわれずに、今生目の前の小さなことをひとつひとつやって、最後に振り返った

ときに、これが私の人生だった、と かんがはれた、と言えぬものでありたいと
思いました。

この神聖な零回真の中で、生きることも死ぬことも、祝福されることであり、
たからこそ、半青一杆、生きなければならぬ、と思いました。

今回は、このように、銀座書斎の奥の聖域に足を踏み入れる機会を
いただいたこと、「レライム」という神聖な音楽を聴かせていただいたこと、
本当にありがとうございました。

またまた「自分」、固定観念やたこひのいらぬものを抱えているとは、と
いうことを改めて実感しました。

いの浄化や、体中の毒素を取り除いて、どうすればもっと自然に
一生懸命、生きていけるのか、ということも、これから考えていきたいと思つた。

ありがとうございました。